コラボ教育での学び　～「ヘルスプロモーション論」学外演習の報告～

12月20日、1年生および編入3年生の必修科目「ヘルスプロモーション論」のコラボ教育を行いました。本年度のテーマは、「アンチエイジングの科学～正しく知って、行うために～」とし、30名の教育ボランティアの方々（西区24人、須磨区4人、垂水区・北区各1人）に参加いただきました。科目担当の加藤准教授から「抗加齢医学」に関する講義を受けた後、学生は教育ボランティアの方から「加齢をどのように捉えているか」「老化を予防する生活」について話を伺いました。年齢、性別の異なる教育ボランティア2名と学生6名でグループをつくり、「老年期にある方の健康と暮らし」に個別性や多様性があることに気付いてもらう工夫をしました。学生のレポートでは、教育ボランティアの方それぞれに「老い」に対する感じ方や考え方の違いがあり、その中でも皆、人生において目標を持っていることで元気に過ごしておられることを学んだ記述がありました。また「健やかに老いることとは?」の課題に対し、「見た目は元気そうだが、実際は多く病気を抱えておられた。健やかに老いるとは、病気にならないことだけでなく、社会に自分が貢献していることが生きる目的になっている」「老いるとはあまりいい響きではないが、捉え方、向き合い方で大きく変わることができ、年齢だけが直接老いにつながっていないことがわかった」「老いることは悲しいことではなく、誰にでも訪れることであって、生きている証と話を聞かせていただいた」など、健康や老年期にある人に対して学生自身が抱いていたイメージとの違いについても気付く機会となったと思います。この演習を通じて学んだこと、あるいは感じたことを、2年生から始まる実習で活かしていただきたいです。

学生と教育ボランティアの方々との意見交換

以上、「地域の顔」他、報告3点は地域連携・研究センター准教授 相原洋子が行いました。

COC 研究ひろば　第８回
～共同研究が生み出す力～

地域連携教育・研究センター　助教　石井久仁子

COC共同研究は、神戸市が課題に掲げている医療連携の強化や地域ケアシステムの構築等の解決に向けて、訪問看護や継続看護実践が行える人材の育成や、多職種連携のあり方の探求を目的に取り組む研究です。研究は、本学教員が地域ケアの担い手である保健･医療･福祉関係者等と研究チームをつくり、それぞれの知識や経験を活かした多様な視点で検討を重ねながら進めています。

COC共同研究の助成がスタートした平成26年度から28年度までの3年間に、24件（内11件の継続研究を含む）の研究課題が採択され、平成28年度は右記の研究が実施されています。COC共同研究の成果は各種の学会や本学のCOC市民公開講座、シンポジウム等で報告を行っています。私自身も「認知症の高齢者と家族が地域で暮らす力を獲得していく過程と支援のあり方の検討」と「重層的な見守り体制構築にむけた基礎調査：徘徊ネットワーク事業評価のベンチマーク開発」の2つの共同研究に取り組んできました。

- 地域認知症支援ボランティア育成にむけた介入研究
- 継続看護強化のための教育プログラム案の作成
- 家族による終末期患者の看取り体験を語る会の設立と体験のデータベース化に関する課題：終末期患者の家族・遺族支援プログラムの実施・評価
- 強い心理反応や精神症状を有する利用者や家族の対応に困難を感じる訪問看護師を対象にした支援体制の検討
- 地域診断を反映させた事業目標達成のための仕組みづくりの検討
- もの忘れの気がかりがある人の表出されにくいニーズの把握と支援のあり方

平成 28 年度
COC 共同研究課題一覧

共同研究では、研究代表者のリーダーシップのもと、多様な視点をもった共同研究者がコミュニケーションを重ね、協働して探求する1つ1つの過程において、知識の深まりや視点の拡がり、新しい発見があります。また、私のように研究経験が浅い者にとっては、研究の進め方や姿勢を学ぶ貴重な機会になっています。共同研究によって生まれた力が超高齢社会のさまざまな健康･生活課題の解決の一助となり、市民の皆様の福利につながるよう、今後も取り組んでいきたいと思います。